

紀長谷雄作品研究

——「春雪賦」注釈——

焼山廣志

一
紀長谷雄の作品群の中で「賦」として現存しているものうち全文を窺いしれるのは、「春雪賦」「柳化爲松賦」「風中琴賦」の三篇のみである。

先に拙稿で「柳化爲松賦」を取り挙げ解釈を試みた（注一）が、今回はそれに続いて「春雪賦」に的を絞って注釈に徹した一試論を展開してみる。

この作品は『本朝文粹』にも、収録されており、『和漢朗詠集』中に「春雪賦」の抄句が「冬・雪」の部に採られている（注二）。注釈としては既に柿村重松氏の『本朝文粹注釈』の中で詳細な出典考察がなされている。又、日本古典文学大系『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』で小島憲之氏よりの確な注の施されたものが公にされている。

今回の拙論は、先学とりわけ前述の柿村氏、小島氏二者の業績の重複のそしりをまぬがれないが、筆者は現在、菅原道真の

賦に注釈を施す作業に続いて紀長谷雄の賦の試読に取りくんでいる。その一環として若干付加する点も残されていると思われるので改めてこの作品を取りあげ考察を試みた。

本文は三木清氏著『紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引』（和泉書院索引叢書27）に従った。訓は、前書ならびに小島憲之氏校注の日本古典文学大系『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』を参考にし、私に訓みを施した所もある。又試読に際しては柿村重松氏著『本朝文粹注釈』の注及び前述の日本古典文学大系に付せられている小島憲之氏の頭注、補注に拠る事大である。

二

この「春雪賦」についての言及として管見では川口久雄氏の次の一文がある。

四段より成り、「盈尺表端」を順次韻字として押す。これは文選の雪賦の「盈尺則呈三端於豊年」という句に基づく。この

考えは積雪のある年は豊年だという毛伝以来、万葉集にも影響した民間信仰をふまえている。(注三)
 更には藤原尚氏の次の一文が注目される。

「春雪賦」は「盈尺表端」を韻とするが 文選十三 謝惠連の「雪賦」の「尺に盈てば端を豊年に呈す」とあるに由る。この賦は豊年を慶ぶとともに郊外の春気を捉える。初学記第二雪の事対、または引用の詩より辞藻を得る。(注四)

両氏の指摘のごとくこの「春雪賦」の賦題は『文選』の次の一文に基づく。

『文選』卷十三「雪賦一首」謝惠連の一文の中の「相如於_レ是避_レ席而起、俊巡而揖曰、臣聞雪宮建_ニ於東國、雪山峙_ニ於西域。岐昌發_ニ詠於來思、姫滿申_ニ歌於黃竹。曹風以_ニ麻衣_一比_レ色、楚謡以_ニ幽蘭_一儷_レ曲。盈_レ尺則_ニ端_一於豊年、表_レ文則表_ニ於陰徳_一。雪之時義遠矣哉。請言_ニ其始_一」(下略) (傍線筆者)。
 なおこの一文は『初学記』卷第二雪第二の「事対」「盈尺」の項及び「賦」の項に載せられている。又『藝文類聚』卷第二天部下「雪」の「賦」の項にも採られている。

三


「春雪賦」は題辞の下に「以盈尺表端爲韻」とあり題韻が

「盈」「尺」「表」「瑞」として課されている作品である。換韻も四回なされている。従って全文を換韻毎に四段落に分けて以下解釈を試みる。

○春雪賦

〔広韻〕

〔平水韻〕

雪_○之_○逢_○春_○
 深_●不_●過_● 

入声二十二昔韻

一_●時_●於_●山_●澗_●
 同_●色_●於_●沙_●磧_●

入声二十二昔韻

疑_○地_○而_○纒_○没_○馬_○蹄_○
 滿_○庭_○以_○漸_○封_○鳥_○跡_○

入声二十二昔韻

或_●逐_●風_●不_●返_●
 亦_●當_●晴_●猶_●殘_●
 如_○振_○群_○鶴_○之_○毛_○
 疑_○緜_○衆_○狐_○之_○腋_○

入声二十二昔韻

※「○」は平韻、「●」は仄韻、「◎」は平声の押韻、「◎」は仄声の押韻、「△」は題韻、「()」は対句を示す。以下同じ。

【訓】①

雪の春に逢へる
深きこと尺に過ぎず

時を山澗に一にし
色を沙磧に同じくす

地に凝りては纒かに馬蹄を没し
庭に満ちては漸く鳥跡を封す

或いは風を逐ひて返らず、群鶴の毛を振ふがごとし
亦是晴に當りて猶残る、衆狐の腋を綴るかと思ふ

通釈 ①

春の雪は降っても深さは一尺ほどに過ぎない。そして降る時は山も谷も同時に降り、その雪の白さは川原の水に洗われた砂や石のように白い。

しかしこの春雪は地上に落ちてこおりついてもやっと馬の蹄を隠す程度であり、庭にいっぱいになってもやっと鳥の足跡を埋めるぐらゐである。

春雪の、風に追いやられて返ってこない様子は群鶴が羽を振った時にその羽毛が飛ぶのに似ており、また、空が晴れてきてもとけずに残っている雪の様子は多くの狐の腋の下の白い毛を綴る

て作った狐の皮衣ではないかと思われることだ。

語釈 ①

○山澗 山谷。『漢語大詞典』には、「亦作『山澗』。山間の水溝」との説明があり、「唐・韋應物・答僮奴重陽二甥」の「山澗依磽壻、竹樹蔭清源」の例を載せる。 ○沙磧 砂洲。『漢語大詞典』には、『沙灘、沙洲』との説明があり、「北周・庾信・奉和泛江」の「錦纜迴沙磧、蘭橈避秋洲」の用例を、又「唐・載叔倫・屯田詞」の「春來耕耕遍沙磧、老稚欣欣種禾麥」の例詩を引く。

○馬蹄 馬のひずめ。『莊子』「馬蹄」に「馬蹄可_レ以_レ踐_二霜雪_一」の用例が見出せる。『白氏文集』「早朝賀雪寄陳山人」に「上堤馬蹄滑、中路蠟燭死」の句が、又、同じく「錢塘湖春行」に「乱花漸欲迷人眼、淺草纒能没馬蹄」の句が見出せる。なお、この白詩の表現箇所について小島憲之氏は前書の補注で「纒…漸」の表現法の一例として「取り挙げられている。（注五）恐らくは長谷雄はこの白詩の抄句を踏まえて「凝地而纒没馬蹄、滿庭以漸封鳥跡」の構想を得たと考えられる。『菅家文章』「小廊新成、聊以題壁」に「行路馬蹄斜側見、到門人語近前聽」の句が見える。

○鳥跡 鳥のあしあと。鳥迹に同じ。『司馬光・夏日西齋事詩』に「小院地偏人不_レ到、滿庭鳥迹印_二蒼苔_一」の句が見える。

○群鶴之毛 鶴の羽毛。又雪の形容。『庾信・上益州上柱國趙王詩』に「鶴毛飄_二乱雪_一、車轍轉_二飛蓬_一」の句が見える。

○飛蓬 飛蓬。『庾信・上益州上柱國趙王詩』に「鶴毛飄_二乱雪_一、車轍轉_二飛蓬_一」の句が見える。

○車轍轉 飛蓬。『庾信・上益州上柱國趙王詩』に「鶴毛飄_二乱雪_一、車轍轉_二飛蓬_一」の句が見える。

小島憲之氏が前書の補注で指摘されている(注六)ようにこの表現には賦題の典拠になっている謝惠連の「雪賦一首」中の「皓鶴奪_{ハク}鮮_{セン}、白鷗失_{ハク}素_ソ(皓鶴も鮮を奪はれ、白鷗も素きを失ふ)」の句が間接的に投影されている。なおこの句中の「皓鶴」の説明として、小尾郊一氏は「相鶴経」に「鶴は千六百年にして形定まりて色白し。復た二千年にして大毛落ち茸毛生ず。色は雪のごとく白し」とあるの一文を付せられている。

(「全釈漢文大系27 文選〈文章篇〉二」一七七頁) 『菅家文草』「早春侍宴仁寿殿一同賦春雪映早梅、應製」に「鷄舌纒因風力散、鶴毛獨向夕陽寒」の句が、又同じく「客居對雪」に「立於庭上頭爲鶴、居在爐邊手不龜」の句が類似表現として見える。○衆狐之腋 狐の腋下の毛皮。転じて貴人の衣。

狐掖。この語には前書の補注で小島憲之氏が指摘されているように(注七)『史記』の「孟嘗君列伝」の故事、及び『藝文類聚』「卷第二・天部下・雪」の中に採られている『晏子春秋』の次の一文の故事が踏まえられている。

晏子春秋曰、景公時、雨雪三日、公被狐白之裘、晏子入、公曰、怪哉、雨雪三日不寒、晏子曰、古之賢君、飽而知人饑、温而知人、寒、公曰、善。出裘發粟、以與饑寒者(晏子春秋) 晏子春秋卷一、内邊諫上第一に曰く、「景公の時、雪雨ること三日、公、狐白の裘を被る。晏子入る。公曰く『怪しかな、雪雨ること三日なるも寒からず』と。晏子曰く、『古の賢君は、飽きて人の饑を知り、温かにして人の寒きを知る』と。公曰く、『善し』と。裘を出だし粟を發して、以

て饑寒せる者に與へしむ(本文・訓ともに『藝文類聚』(卷二)訓読付索引) 大東文化大学東洋研究所編 23頁に拠る) この故事を踏まえた「狐腋」の具体的な用例として『白氏文集』「醉後狂言、酬贈蕭殷二協律」の中に「吳綿細軟桂布密、柔如狐腋白似雲」の句を指摘することが出来る。又この語の用例として「元稹・代曲江老人一詩」に「鞞袖誇狐腋、弓弦尚鹿胎」の句が、又、『田氏家集』「拜美濃之後、蒙菅侍郎見視喜遥兼賀州一詩草上。依本韻」継之和之に「師家狐白例名裘、閭巷壘黃豈化州」という類似した表現が見出せる。

○ 觀夫

皎然影亂
飄爾質輕

下平声一四清韻

懸天有色
墮地無聲

下平声一四清韻

埋園蔬而稚牙自沒
掩門柳而老葉相驚

下平声一二庚韻

乍助書帷之夜光
忽入粧樓而朝舞

縹映自照
粉匣盡

下平声一四清韻

〔平水韻〕

【訓】㊦

觀れば夫れ

皎然として影亂れ

飄爾として質輕し

天に懸かりて色有り

地に墮ちて聲無し

園蔬を埋めて稚牙自ら没し

門柳を掩ひて老絮相驚く

乍ち書帷を助けて夜に光り縹帙自ら照り

忽ち粧樓に入りて朝に舞ひ粉匣に盡く盈つ

通釈 ㊦

よく見ると、雪は白く清らかでその影は乱れ、雪の飛び散り
翻るその姿は軽やかである。空中に飛び乱れている時は白色
を帯び、地上に落下しても何の音もしない。

菜園の野菜類を雪が埋めるので若い芽は自然と雪の中に埋も
れ、門の傍らにある柳を春雪が包むとそのあまりの白さに老い
た柳の白い花が驚くほどだ。

その春雪が急に書斎のとばりの中の夜の燈火を助けて光ると、
その雪明かりにより書物が自然に照らし出されて読むことが出

来るようになる。また、突然朝化粧をしている女人の部屋に春
雪が舞い込んで化粧箱がすっかり白く満ち満ちてしまう。

語釈 ㊦

○皎然 潔白なさま。「後漢書、郡國志、雲南縣、注」縣西

有レ山特高、與二雲氣一相連結、固陰沍寒、廣志云、五月霜雪皎

然。の例が見える。又『文選』「雪賦一首」の中に「縱二心皎

然一、何處何營」の用例が見え、この「皎然」の説明として小

尾郊一氏は「皎然」とは潔白なさま。「浩」と通ずる。『孟

子』公孫丑上に「我善く吾が浩然の氣を養ふ。敢て問ふ。何を

か浩然の氣と謂ふと。曰く、言ひ難し。其の氣たるや、至大至

剛、直を以て養ひて害すること無ければ、則ち天地の間に塞る」

という。浩然の氣は天地の間に満ちている公明正大な氣」とい

う一文を付せられている。（『全釈漢文大系27 文選』文章篇

二）一八一頁） ○飄爾 風に吹かれるように身軽に行く

さま。類似表現に「飄然」、「飄飄」、「飄飄」等がある。

『白氏文集』「霓裳羽衣歌。和微之」に「飄然轉旋迴雪輕、媽

然縱送游龍驚」の句が、又「胡旋女。天寶末康居國獻之」に

「絃鼓一聲雙袖舉、迴雪飄飄轉蓬舞」の句が、同じく「江南遇

天寶樂史」に「冬雪飄飄錦袍煖、春風蕩漾霓裳飄」の句が見え

る。『田氏家集』「七言就花枝應製一首」に「風飄香雪紫綰閣、

霜撲銀塩映玉卮」の句が、又同じく「菊花」に「白蕊白中飄雪
粉 黃葩杆後起金塵」の句が見出せる。 ○質輕 雪それ

自体は軽やかである。これも、『文選』「雪賦一首」の「白羽雖白、質以輕兮。白玉雖白、空守貞兮。未若茲雪、因時興滅。へ白羽白しと雖も質以て輕し。白玉白しと雖も、空しく貞を守る。未だ若かず、茲の雪の時に因つて興滅するに」の一文からの投影がなされた表現と考えられる。○園蔬

はたけの野菜。園菜。『白氏文集』「涓邨退居禮部侍郎・翰林錢舍人詩一百韻」に「園菜迎霜死、庭蕪過雨荒」の句が見える。○門柳 かど口にある柳。門前の柳。「高適、重陽詩」に「眞成獨坐空搔首、門柳蕭々噪暮鴉」の句が見える。

『白氏文集』「東南行」に「春色辭門柳、秋声到井梧」の句が見える。『凌雲集』「伏枕吟」に「客斷柳門群雀噪、書帛蓬室晚螢輝」の句が、『文華秀麗集』「和内史貞主秋月歌」に「寒聲浙瀝竹窓虛、晚影蕭條柳門疎」の句が見える。○老絮 老いた柳の白い花。柳絮。この語には既に柿村氏の指摘にある『世説新語』「卷之上、言語第二」の語が踏まえられている。

同内容の話は『藝文類聚』「卷第二・天部下・雪」に「世説曰、謝太傅寒雪日内集。與兒女講論文義。俄而雪驟。公欣然曰。白雪紛紛何所似。兄子胡兒曰。散塩空中差可擬。兄女曰。未若柳絮因風起。へ世説に曰く「謝太傅、寒雪の日に内集し、兒女と文義を講論す。俄かにして雪驟ぐ。公、欣然として曰く「白雪

の紛紛たるは何の似たる所ぞ」と。兄の子胡兒曰く、『塩を空中に散けば差擬す可し』と。兄の女曰く、『未だ柳絮の風に因りて起るに若かず』と」(本文・訓ともに『藝文類聚(卷

二) 訓読索引」24頁。以下同じ)と引用された一文を載せる。

『初学記』「雪第二、事対、柳絮」の項にも同文を載せる。「柳絮」の用例として『白氏文集』「對火翫雪」に「銀盤堆柳絮、羅袖博瓊屑」の句が見出せる。又、小島憲之氏が指摘されている(注八)詩句が、『芸文類聚』「卷第二、天部下、雪」の中に「梁劉孝綽對雪詩曰、桂華殊皎皎、柳絮亦霏霏、詎比咸池曲、飄飄千里飛へ梁の劉孝綽の雪に對する詩に曰く、「桂華は殊に皎皎たり、柳絮も亦霏霏たり。詎ぞ咸池の曲に比し、飄飄として千里飛ばん」と載せる。『初学記』「雪第二・詩」の項にも同詩を載せている。『懷風藻』「文武天皇 三首—三・

五言。詠雪。一首」に「林中若柳絮、梁上似歌塵」の句が見える。この詩と、紀長谷雄の「春雪賦」の表現には詩想的に非常に近いものがある。(注九)又『田氏家集』「觀禁中雪」の中の「仙宮不日銀臺立、御苑非時絮柳牽」の句が見出せる。この嶋田忠臣の詩にも紀長谷雄の「春雪賦」と類似した表現を他にも指摘することが出来る。(注一〇) ○書帷 書齋のと

ばり。この語と雪との関わりは、柿村氏・小島氏の指摘の如く、孫康の故事に基づくが、この話は『芸文類聚』「卷第二、天部下、雪」に「孫康家貧、常映雪讀書、清介、交遊不雜」とあり、『初学記』「雪第二、事対、映書」の項にも「宋齊語曰、孫康家貧、常映雪讀書、清淡交遊不雜」の同記事を載せる。この故事を踏まえた類似表現として『凌雲集』「和菅清公賦早雪」に「班姬秋扇已無色、孫子夜書獨有明」の句が見えるし、又前述

の『懐風藻』「五言。詠雪。一首」に「代火輝霽篆、逐風廻洛濱」の句が見出せる。この「霽篆」については小島憲之氏による詳細な説明がある。(注一一) 「書帷」という語そのものの用例としては『白氏文集』「代書詩一百韻寄微之」に「秋風拂琴匣、夜雪卷書帷」の句が、同じく「春夜喜雪、有懷王二十二」に「夜雪有佳趣、幽人出書帷」の句が見える。○縹帙はなだ色の本づつみ。転じて書巻をいう。帙は書衣。「洞庭筠、訪知元上人遇暴經因有贈詩」に「縹帙無塵滿畫廊、鐘山弟子靜焚香」の句が見える。○粧樓 化粧をする高樓。婦人の室。妝樓。『白氏文集』「春詞」に「低歌花樹映小粧樓、春入眉心兩點愁」の句が見える。『文華秀麗集』「奉和翫春雪一首」に「凝黏翠箔懸珠滴、競入粧樓作玉塵」の句が見える。『凌雲集』「春日代妓古詩體」には「通夜粧樓獨畫眉、春朝擬向歌舞臺」の句が見える。『菅家文章』「明月、心製」には「何處粧樓擲玉環、一明一暗曉雲間」を見出せる。○粉匣 おしろい箱。粉匣。粉盒。柿村氏が『本朝文粹注釈』の語注で指摘されている「梁の簡文帝」の詩は『芸文類聚』「卷二、天部下、雪」の「詩」の項に「又詠雪顛倒使韻曰、塩飛蝶舞、花落飄粉匣へ又、雪を詠ず(る詩)、顛倒して韻を使ふ、に曰く「塩飛んで蝶の舞を乱し、花落ちて粉匣に飄へる」と見える。

㊦ 況亦

搖颺於和暖之中
粉飛於煙雲之

上声三〇小韻

〔広韻〕

〔平水韻〕

點人皆催二毛之年
拂窓未辨狐月之曉

上声二九篠韻

望書梁以玉塵繞
望花鈎而珠簾映

上声三〇小韻

參差落水暗伴負水之鱗
聚散遍林欲閉宿巢之鳥

上声二九篠韻

【訓】㊦

況むや亦

和暖の中に搖颺し
煙雲の表に粉飛す

人に點きては皆二毛の年を催し
窓を拂へば未だ狐月の曉を辨へず

花鈎を褰げれば珠簾に映し
畫梁を望めば玉塵を繞る

上声一七篠韻

「參差として水に落ち暗に氷を負へる鱗に伴ふ
聚散して林に遍く、巢に宿れる鳥を閉ざさんとす。」

通釈 ㊦

ましてまた、春雪はのどかで暖かい春の空に揺れ動いて舞い上がり、霞や霧の表面に乱れ飛んでいる。

この雪が人の髪にかかるると全て白髪交りの老人のように見え、その雪が窓を払い降り積ると孤月がかゝる明け方の空と区別がくかないほどである。

春の雪の降っている様は、美しい鉤で簾を巻き上げてみると、更に外の面に玉のような美しい簾が垂れ下がっているのではないかと疑われるほどだ。又、春の雪の飛ぶさまは、色彩を施した美しいうつばりを見上げて、その梁のまわりに玉のように美しい塵がめぐっているかのようである。

雪が入り乱れて水中に落ちて行くと春になり氷が漸くとけて水面に姿を見せるようになった魚の泳ぎにつき従い、又、雪が集まったり散ったりしながら林のすみずみにまで降り積り、巢の中に宿っている鳥をその巢の中に閉じこめようとしている。

語釈 ㊦

○搖颺 吹き動かす。『文華秀麗集』「奉和折楊柳一首」に

「楊柳東風序、千篠搖颺時」の句が、同じく「神泉苑九日落葉篇、一篇」に「自然灑落任朔風、搖颺徘徊滿雲空」の句が見え

る。○和暖 天氣のなごやかで暖かなかこと。『楚辭』

「王逸・九思・傷時」に「風習習兮和暖、百草萌兮華榮」の用例が見える。『白氏文集』にも前載の「醉後狂言酬贈蕭殷二協律」に「我有大裘君未見、寬廣和暖如陽春」の句が見え、又同じく「春暖」に「風痺宜和暖、春來脚校輕」の句が見える。

○紛飛 乱れ飛ぶ。紛紛。『凌雲集』「詠雪」に「紛紛白雪從千里、熒熒漣漣一何斜」の句が見える。

○烟雲 かにけむった景色。『沈亞之、別龐子蕭詩」に「雨雪依巖避、煙雲逐步開」の句が見える。『文華秀麗集』「和菅清公傷忠法師」に「臘老煙雲裏、歸眞損化形」の句が、又「凌雲集」「贈寶和尚」に「遙想焚香觀る念處寥寥日夜對雲烟」の句が見える。

○二毛 白髪まじりの老人。二毛は白い毛と黒い毛。斑白。『春秋左氏傳』「僖、二十二」に「君子不重傷、不禽二毛」(注

二毛、頭白有二色者也)と見える。日本人の漢詩文にも多用されているこの語の典拠としては『文選』「秋興賦并序・潘安仁」の「晉十有四年、余春秋三十有二始見二毛」がつとに有名である。『白氏文集』にもこの語が散見する。例えば「自歎二首」

二」に「二毛晝落梳頭懶、兩眼春昏點藥」とか、「新秋」に「二毛生鏡口、一葉落庭時」の句が、又「秋雨中贈元九」に「莫恠獨吟秋思苦、此君校近二毛年」の句等が見える。『菅家文章』「絶句十首、賀諸進士及第」の四首目に「初有二毛更六年、此朝筋骨可神仙」の句が見え、「始見二毛」に「我老於潘

一十年、二毛何處甚留連」の句が見える。○孤月 ひと

つの月。一輪の月。「王昌齡・盧卿別人詩」に「行到荆門上三峽、莫將孤月對猿愁」の句が見える。「文華秀麗集」「江頭春晚」に「泉聲驚寢覺隣溪、天辺孤月乘疾疾」の句が見える。

『凌雲集』「遠使邊城」に「黃昏極嶂哀猿叫、明發渡頭孤月團」の句が、「菅家文章」「扇」に「一轉看孤月、頻搖得細風」の句が、「紀長谷雄・賦月詩」に「皎々孤懸月、清光萬里過」の句が見える。○花鉤はなかぎ 美しい鉤。簾を巻くに用いるもの。

「顔舒・鳳樓怨詩」に「佳人名莫愁、珠箔上花鉤」の句が見える。○珠簾 たまのすだれ、たまで飾ったすだれ。

珠箔。「駱賓王・帝京篇」に「翠幌珠簾不獨映、清歌宝瑟自相依」の句が、又「王昌齡・西宮春怨詩」に「西宮夜靜百花香、欲捲珠簾春恨長」の句が見える。紀長谷雄はこの賦の詠作の素材の多くを『芸文類聚』に求めている事は前述で指摘してきた

所だが、この語句も『芸文類聚』「巻第二・天部下・雪」の項の「梁簡文帝・雪朝詩」に「已觀池影亂、復視簾珠濕」を見出すことが出来る。『文華秀麗集』「和內史貞主秋月歌一首」に「天秋夜靜月光來、半捲珠簾滿輪開」の句が、「菅家文章」

「雨晴對月、韻用流字、應製」に「綠酒猶催醒後盞、珠簾未下晚來鉤」の句が見える。○畫梁えびら 美しく彩色したうづばり。「廬照鄰・長安古意」に「雙燕雙飛繞畫梁、羅帷翠被鬱金香」の句が見える。『文華秀麗集』「奉和觀新燕一首」に

「既能忘却蒼波遠、朝夕欲巢畫梁邊」の句が見える。○玉塵 雪の異名。『白氏文集』「酬皇甫十早春對雪詩」に「漢

漢復霧霽、東風散玉塵」の句が見える。『芸文類聚』「巻第二・天部下・雪」の項の「梁何遜・詠雪詩」に「若逐微風起、誰言非玉塵」の句が見える。『文華秀麗集』「奉和翫春雪」に「凝黏翠箔懸珠滴、鏡入粧樓作玉塵」というこの賦の表現と酷似した句が見える。(注一二) 又同様に『懷風藻』「詠雪・文武天皇 一首」の中に「林中若柳絮、梁上似歌塵」という類似表現の句が見出せる。

【参考】『望畫梁以玉塵繞』の表現について

柿村氏は「本朝文粹注釈」の語注で「劉向別錄曰、魯人虞公、發聲清哀、蓋動梁塵、藝文類聚、樂部所引」と指摘され(『本朝文粹註釋』一八頁) 小島氏は前掲の『懷風藻』「詠雪・大神高市麻呂・一首」中の「梁上似歌塵」の頭注に「歌声が美しくて梁の上の塵を動かすという虞公の故事」と説明され、更に補注で『文選』「嘯賦」中の「虞公輟声而止歌」の李善注の一文を引用されている。(日本古典文学大系「懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹」四五二頁) この虞公の故事は『芸文類聚』「巻四十三・樂部三・歌」の項に「劉向別錄曰、有麗人歌賦、漢興以來、善雅歌者、魯人虞公、發聲清哀、蓋動梁塵」と引かれている一文がある。○參差 入り雑るさま。三つのものの雑るを参とい、二つのものの雑るを差という。又長短斉しくないさま。一様でないさま。『詩經』「周南・閔雎」に「參差荇菜、左右流之(集傳)參差、長短不齊之貌」の用例が見える。『田氏家集』「拜佛像」に「身厭世網入深山、佛像參差古殿間」の句が

見える。 ○負水 小島氏は補注で「柿村注に礼記、月令
 〈魚上レ水〉をあげ、上は負に同じという。春になって氷の処
 に魚が上る意」と説明されている。(日本古典文学大系『懐風
 藻・文華秀麗集・本朝文粹』四九〇頁) ○聚散 あつま
 ることと散ること。あつめることと散らすこと。 『莊子』
 「則陽」に「緩急相摩、聚散以成」の例が見える。

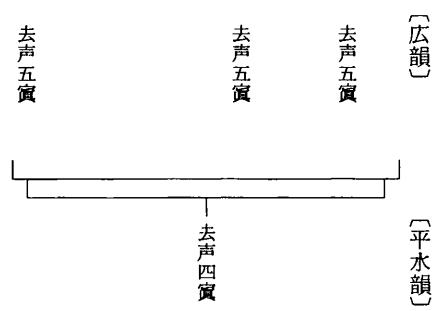
④ 既而
 地○毛○肥○
 土○膏○施○

農○畝○普○液○
 泉○脈○遠○被○

豈○止○宿○墻○陰○而○夕○寒○
 忽○能○混○郊○外○之○淑○氣○

適○在○遲○日○之○可○樂○
 還○知○豐○年○之○致○
 ▲
 ▲

【訓】④
 既にして
 地毛肥え
 土膏施す



農畝普く液ひ
 泉脈遠くに被ぶ

豈に止に墻陰に宿りて夕べの寒きのみならむや
 忽ち 能く郊外の淑氣に混ず

適 遅日の樂しむべきに在りて
 還に知りぬ 豊年の瑞を致すことを

通釈 ④

雪が多く降るので地に生えた草木が繁り、土地は肥沃になっ
 ていく。田畝はあまねくうるおい、地中の水脈は遠くまで及ぶ。
 とすれば、春雪は単にわずかに垣根のかけに残って春の夕べを
 寒く感じさせるものではなく、郊外のなごやかな春の氣に混じ
 り一層、のどけさを増すものとなるのである。
 まさしく今は、日足の遅いのだかな春の樂しむべき時にあり
 て、更にこの春雪を見るのは豊年のめでたいしるしであること
 を実感するのである。

語釈 ④

○地毛 地に生えた草木。『漢語大詞典』には「指地面上生
 長的荏椽・樹木等」と説明がある。『菅家文章』「寒早十首」
 一に「地毛郷土瘠、天骨去來貧」の例が見える。 ○土膏
 土地の肥沃なこと。又肥沃な土地。「蘇軾・柏石園詩」に

「土膏雜糞壤、成壞幾何耳」の句が見える。○農畝はたけ。いなか。○泉脈 地中の水脈。「韋應物・春遊南亭詩」に「南亭草心綠、春塘泉脈動」の句が見える。『白氏文集』「早春獨遊曲江」に「氷銷泉脈動、雪盡草芽生」の句が見える。○牆陰 かきねの陰。『漢語大詞典』には「牆的陰影處。牆的陰暗處」との説明がある。「岑參・題山寺僧房詩」に「窓影搖羣木、牆陰載一峯」の句が見える。○淑氣 善い氣。春日のなごやかな氣。春の清いけはいい。「唐太宗・春日芽宴羣臣詩」「韶光開令節、淑氣動芳年」の句が見える。○遲日 暮れるのが遅い日。春の日。永日。

『詩經』「幽風・七月」に「春日遲遲」の句が見える。『文華秀麗集』「仲雄王・奉和春日江亭閑望一首」に「山館鳳庭遶、老圃鋤遲日」の句が、同じく「巨識人・春日餞野柱史奉使存問渤海客・一首」に「遲日未銷邊路雪、暖煙遍著主人場」の句が見える。又「田氏家集」「暮春宴普尚書亭同賦掃庭花自落一字一二」に「清晝憐看遲日暮」の句が見える。○豐年 穀物

の実りのよいとし。五穀豐熟の年。豐歲。樂歲。この語は前述したように「文選」「謝惠連・雪賦一首」の「盈尺則呈瑞於豐年」に基づくものであるが、その雪が「一尺積れば豐年の瑞兆」という考え方は古く『詩經』の次のような一文に遡ることが出来るのではないか。

上天同雲 雨 雰雰 霏霏
益之 以 霰 霰 既 優 既 濕

既霑 既足 生我百穀

（『詩經』「小雅・信南山二章」）

高田眞治氏はこの『詩經』の一文の注釈の中で「上天には雲があつまり、どんよりとして雪模様となって雪が粉々として飛散する。豐年の兆である。春になっては小雨が降り添うて優かに厚く大地を霑し足りて、百穀も豊かに生ずることである。冬に雪が深いのは豐年の兆であるとは、古來農人の常に言うところである。毛伝にも「豐年の冬は、必ず積雪有り」とは、これである。孔疏には「明年將に豊ならんとすれば、今冬積雪宿沢を為すを謂ふなり。然らば則ち積雪は是れ年の前冬。而して豐年の冬には必ず積雪有りと言ふは、此の章には、穀の生ずるを言ひ、下章には其の成熟を言ふを以て、一生の生成を挙げて以て首尾の次を為す。復た歲初歲末、同年に限るに非ず」との説明を付せられている。（『漢詩大系 詩經下』二二九頁）この考え方を踏襲した詩句が『田氏家集』に散見する。『田氏家集』「觀禁中雪」に「常看順令未曾愆、瑞雪呈豐又可憐」の句が、同じく「元慶七年冬美濃大雪以詩記之」に「且莫誇張豐歲瑞、先須勞問孝廉家」の句が、又「府城雪後作」に「野老始知春澳沐、農夫只濟歲豐穰」の句が見える。

注一 紀長谷雄作品研究 — 「柳化爲松賦」

注釈一 （「九州大谷国文」第二十七号）

注二 或は風を逐うて返らず 群鶴の毛を振ふがごとし また

晴に當つてなほ残り 衆狐の腋を繰れるかと疑ふ
或逐風不返 如振群鶴之毛
亦當晴猶殘 疑綴衆狐之腋 春雪賦

紀

(日本古典文学大系『和漢朗詠集・梁塵秘抄』一四三頁・

卷上・冬・雪)

注三 『平安朝日本漢文学史の研究 上』二三六頁

注四 「和製の賦の特徴 — 経国集・本朝文粹の賦 —」注19

一二四頁〜一二五頁

(『中国文学の比較文学的研究』 吉田敬一編)

注五 日本古典文学大系『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』

四九〇頁・補注二四

注六 同右書 四九〇頁・補注二五

注七 同右書 四九〇頁・補注二六

注八 同右書 四五二頁・補注一七

注九 五言・詠雪。一首。

雲羅囊珠起 雲羅 珠を囊みて起り

雪花含彩新 雪花 彩を含みて新し

林中若柳絮 林中 柳絮の若く

梁上似歌塵 梁上 歌塵に似る

代火輝香篆 火に代りて 香篆に輝き

逐風廻洛濱 風を逐ひて 洛濱を廻る

園裏看花李 園裏 花李を看れば

冬條尚帶春 冬條尚し 春を帯ぶ

注一〇

(『懷風藻』文武天皇。三首一三「五言。詠雪。一首」)
(本文・訓とも日本古典文学大系本に従う。八八頁)
(傍線は「春雪賦」との類似表現の箇所と思われる所に筆者が付した。)

觀禁中雪

常看順令未曾愆

禁中の雪を觀る
常に看る令に順ひて未だ曾つて愆

瑞雪呈豐又可憐

たざること
瑞雪豊かなることを呈すには又憐むべし

暗夜猶行明月地

暗夜猶し行く明月の地

人間却踏白雲天

人間却りて踏む白雲の天

仙宮不日銀臺立

仙宮日ならずして銀台立つ

御花非時絮柳牽

御花時ならずして絮柳牽ふ

多怪聖君神化

怪しむこと多し聖君神化

先知寒篤促須綿

先づ知る寒篤くして綿を須あるを促すことを

干時初須

時に初めて綿袋の衣を

綿袋之衣雪也

須ある雪有り

(本文・訓ともに『田氏家集注 卷之上』小島憲之監
修に従う)

(傍線筆者。「春雪賦」との類似表現の箇所と思われる所に付した。)

又渡辺秀夫氏の著書の中にこの嶋田忠臣の詩について次のように論じられている一文がある。

暗夜猶し行く明月の地 人間却って踏む白雪の天 仙宮日ならずして銀台立つ 御花時ならずして絮柳ふ

〔暗夜でも（雪明かりで）月光のもとに歩くようであり、地上をあゆみながらもまるで白雲の天を踏むかのようにだ。宮殿にたちまち白銀造りの高殿ができたかと思われ、宮中の花は春でもないのに柳の綿の花を咲かせたようだ〕

これは、宮中に降り積もる雪を、それぞれ〔月光・白雲・銀・絮柳〕に見立てたものだが、場面の構想としては神仙世界（蓬萊）の宮殿のさまを重ねるものであろう。（下略）

（『詩歌の森 日本語のイメージ』V移ろいと永遠・雪三一六・三一七頁）

注一一 日本古典文学大系『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』四五二頁・補注17

注一二 奉和翫春雪。一首。滋貞主

翫春雪

春雪を翫ぶ

雪影翩翩暗四隣

雪影翩翩暗し

姑射遙聞一處子

姑射遙かに聞く一りの處子

王門時見五車輪

王門時に見る五車の輪

凝粘翠箔懸珠滴

凝りて翠箔に粘えて珠滴を懸け

鏡入粧樓作玉塵

鏡いて粧樓に入りて玉塵と作る

欲伴仙園梅李樹 仙園梅李の樹に伴はむとして

從風灑落艷陽春 風に從ひて灑落す艷陽の春

（『文華秀麗集』滋貞主）

（本文・訓ともに日本古典文学大系本に従う）

〔傍線筆者。「春雪賦」との類似表現の箇所と思われる所に付した）

〔付記〕

この拙稿は、木下文理氏との半年余に亘る論読会を通して討議・検討したものをまとめたものである。とりわけ『文選』等の中国古典籍からの出典考察に多大の時間を割いていただいた。ここに改めて、木下文理氏の御尽力に対し深く感謝の意を表したい。

一九九八年 十月七日 執筆了
（大学院第七回修了・有明高専）